ドラマを構成するメタファーに関する一研究
――「冬のソナタ」を例にして――

田邊　敏明

A study of metaphors used in the composition of drama
――The case of the Winter Sonata――

TANABE Toshiaki
(Received January 10, 2006)

キーワード：ドラマ　概念メタファー　構成　冬のソナタ

Ⅰ　ドラマにおけるメタファーとは

冬のソナタという韓国ドラマが2004年に日本で大変な人気を博した。このドラマでは、役者の華麗さと熱のこもった演技が話題となった。しかしいかにその役者やその演技が優れていたとしても、そのストーリー次第では、ドラマも評価もされず人を引きつけることもなかろう。

実は、このドラマにはストーリー構成にも、また登場人物のセリフにもメタファーが豊富に用いられている。川邊（1987）によれば、ドラマとは「主人公の自由な意志（正）が、それを否定し抑圧しようとする環境＝社会枠（反）と真っ向から対決し、その間にそのいずれでもない、唯一的な新しい行為を、まったく予想せぬ形で発出させること」であり、またジェームス三木（2005）によれば、ドラマの面白さは主人公のコンプレックスが解消され変化していく過程にあるという。このドラマでは、ドラマの軸である正と反にも、また主人公の変化にもメタファーが使われており、さらに主人公の生き方や価値観が現れるといわれるセリフにもメタファーが豊富に盛り込まれている。

ドラマを構成するメタファーについてBonnet（2003）は、物語の秘めた真実を人に伝えるには、物語のキャラクターや場所やアクションや事物などの視覚的イメージ、つまりメタファーにし直すことが必要であるという。さらにドラマとは、特色ある人物の人となりや価値観を通してその真実を伝えるという。一方でドラマには、作品のテーマともいえるハイコンセプト（Katahn, 1999）とか超目標（川邊, 1987）が存在するといわれる。それは主人公の生き方そのものである。このようにドラマや映画のような映像作品では、ストーリーを具体的なイメージ、つまりメタファーとして表すことが多く、それが登場人物の特徴的なキャラクターとなって表れる。

本来メタファー（metaphor 隠喩）とはレトリックの一種であり、それはＡはＢだと言う形式を取り、Ａとは違う言葉（Ｂ）をあえて借りてくる手法である。Ａは主題（tenor）、Ｂは伝達手段（vehicle）と呼ばれ、Ａの顕著でない側面をＢの顕著な面によって引き立

てる表現方法のことである。その引き立てられる共通部分は根拠（ground）と呼ばれる。メタファーでは、あえて違うものにたとえることによって読者に違和感を与え、解釈された時に情感に訴えるのである。メタファーは象徴よりは遠回しの表現だが、それだけ、いったん解釈されると、その印象は強烈に残る。たとえば「君の瞳は湖だ」では、瞳はけして湖ではないが、湖のように“澄んだ”とか、“静かな”という点が引き立てられる。

このようにメタファーはレトリックの一種と位置づけられてきたわけだが、一方でこのようなレトリック的な用い方だけでなく、そもそも思考の基礎をなすものだとする見解がある。その代表が、Lakoff & Johnson（1980）の唱える概念メタファーである。概念メタファーとは「人生は旅」に代表されるように、その構造が見えにくい人生というものを、構造が見えやすい旅によって形を与えるものである。それゆえに概念メタファーは構造メタファーともいえる。旅については誰しもがその構造イメージをもっている。つまり概念メタファーは、見えないものを表してくれる既知の具体的な形であり、視覚イメージの代表である。冬のソナタで主として使われているのが、この概念メタファーである。その代表が「人生は旅」に似せた「純愛は道」である。

メタファーについては、瀬戸（1995）に従って、認識に基づいた悟性メタファーと、身体感覚的にわかる感性的メタファーの分類をFigure 1に、その感性的メタファーの中でも視覚のメタファーをFigure 2に示した。冬のソナタには、この視覚メタファーが豊富に用いられている。

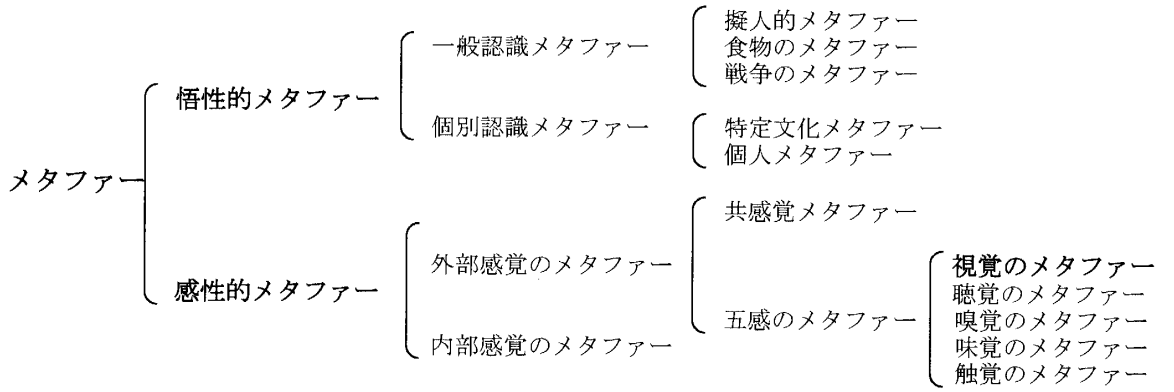

Figure 1　瀬戸（1995）による悟性的と感性的メタファーの分類

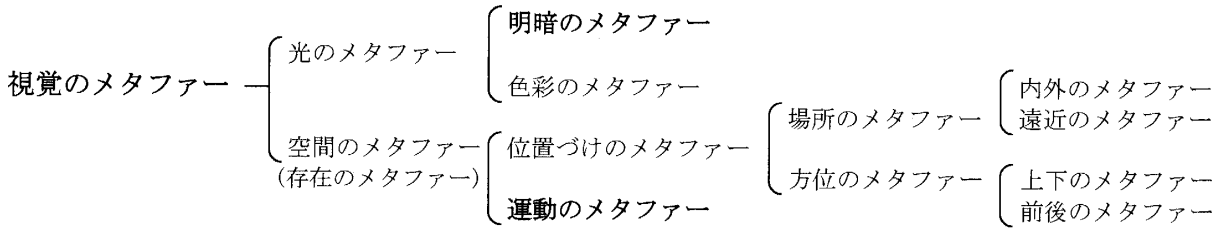

Figure 2　瀬戸（1995）による視覚メタファーの種類

このドラマは、ユジンという一人の少女が高校時代にチュンサンという転校生に恋をし、その初恋をよみがえらせる物語である。その初恋の人は交通事故で突然死んでしまい、その後幼なじみの男性サンヒョクと結婚の約束までする。しかし、10年後の初雪の日に初恋

の人チュンサンとそっくりな人が現れて、再び初恋を思い出すという筋である。そのプロセスで、二人はミニョンを連れてきたチェリンという女性がつく嘘や偽りに惑わされたり、また二人の兄妹疑惑が出たりして、そしてユジンは婚約者サンヒョクへの同情心にも悩まされたりと、ドラマは複雑に展開する。最初はユジンにとってミニョンは初恋の人チュンサンとはあらゆる面で違い、一時は諦めてしまうが、ミニョンの強引かつ優しい誘いにひかれたり、さらにミニョンがチュンサンの記憶をよみがえらせるにつれ、再び思いをつのらせるというドラマである。ユジンのチュンサンへの愛が一途であり、それを中心に織りなすドラマといえよう。

構成としてまずあげられるのは、ユジンがチュンサンに寄せる愛、すなわち純愛である。その純愛を貫くプロセスは、一本の道にたとえられる。実際にドラマの中にも道を歩くシーンがしばしば現れる。またこれがこのドラマのハイコンセプト、超目標である。

次にもう一つの人気の要因は、最近の日本人が忘れかけてきた自己犠牲的な精神である。韓国ではこの精神を恨（ハン）と呼ぶ。恨という精神は儒教に由来し、思い通りにならない運命をそのまま受け入れて生きることである（金, 1998）。ユジンがチュンサンへの思いを叶えられない時に、サンヒョクとの結婚に妥協するのもこの自己犠牲によるものである。長くつき合った方、つまり時間の長い方に寄り添うべきという道徳的結論もこの恨から導かれたものであろう。ユジンがチュンサンを思う気持ちは純愛であるが、このように愛（サラン）が恋人以外の家族や友人にも向かうとなると、逆に純愛を妨害する。チュンサン（ミニョン）でさえ、途中でサンヒョクに遠慮してユジンを彼に預けようとする。このように純愛の道のりは平坦ではない。平坦なものにさせないのが、この家族愛、友人愛であり、それを受け入れる元になっているのが恨である。この純愛の道と家族・友人愛の元になる恨の道がドラマを織りなしている。実は冬のソナタは、この２つの道をそれぞれの男性が導くという仕立てにしてある。これが川邊（1987）のいう正と反であり、正を導くのがミニョンで、反を導くのがサンヒョクである。

確かに映画やドラマのテーマにメタファーが用いられることが多い。たとえば、登場人物がメタファーとなってその時代精神を代弁することもある。「イージーライダー」（Hopper, D., 1969）の登場人物の二人は、フロイトの精神分析でいうと、禁欲的な自我と、快楽的な自我を表しているという（吉田, 1999）。また「千と千尋の神隠し」（宮崎駿; STUDIO GHIBLI, 2001）は、飽食の時代の親と、そして自立していく子どものたくましさのイメージを登場人物に託している。

ドラマの構成に貢献するメタファーについては、上述のBonnet（2003）が触れているが、それはドラマの面白さまで追求したものではない。では冬のソナタの異常なまでの人気にメタファーはどのように貢献しているのだろうか。

そこで本研究では、冬のソナタを例にして、まずそこにどのようなメタファーが使われているかを具体的に見ていき、それらのメタファーがこのドラマをどのように構成しているのかを明らかにする。加えて主人公はその中でどのようなメタファーを背負った存在として描かれているか、さらにどのように変化していくのかを明らかにする。そして最後に、メタファーの構成と変化がドラマの面白さにどのようにかかわっているのかを探っていく。（なお、セリフについては、安岡(2003)を中心にして、テレビや雑誌から補って構成した。また直接のメタファー、あるいはメタファー的表現と思われる箇所にはアンダーラインを施した。）

Ⅱ　ドラマの中心となる概念メタファー

1　道メタファー　ー純愛をたどる道ー

このドラマには、「手を引いてくれる？」と相手の気持ちをうかがったり、「引かれる方に引かれるのもいい」と諭す言葉が出てくる。手を引く、引かれるは、その引き手と一緒に人生を歩むことを意味するメタファーである。純愛の道で手を引くのはミニョンであり、道しるべを示すのもミニョンである。一方で、手を引かれるのを期待するのがサンヒョクである。

（1）道メタファー

①手を引く

サンヒョクがユジンに対して「もしかしたら僕が先に手を差し出すかもしれない。そしたら手をつかんで（引いて）くれる？」とたずねる。（5話　罠）

また縁石を歩くシーンで、「ちょっと孤独で人生ってこんな感じかな」とサンヒョクはいう。（5話　罠）

これはサンヒョクがユジンの人生を追体験したものであるが、あくまでふらついた足取りである。ユジンもよく塀を伝わり歩いてふらつきもするが、誰かに手を取ってもらって歩むことができる。最終的にはサンヒョクは引き手にはなれず、ユジンが手を預けるのはいつもチュンサンかミニョンである。

ミニョン「人生には別れ道に立つ瞬間というものがあるでしょう。こっちに行くべきか、あっちに行くべきか決めなければいけない。決められない時は、手を引かれた方に行くのもいい。こんなふうに。」（9話　揺れる心）

「強引な引き手に身を任せてもよい」「自分が一緒に生きてもいいよ」という説得を含んだメタファーである。

②道に迷う

道には岐路があるが、いったん決めた道から引き戻って再び違う道を歩むと迷ってしまう。

ミニョン「僕は最近、点かない信号を待っている気分です。」
ミニョン「あっちにも横断歩道があるけど、・・・向こうに行きましょうか。」
ユジン「・・・小さい頃にもこんなことがありました。その時は回り道して帰ったんですけど、・・・家までの道のりが遠くて大変だったことが思い出されます。」
ユジン「いずれにしても私の戻るべきことは決まっているじゃありませんか。故障していたとしても私が渡るのはこの道のような気がします。回り道をしたら、私、また迷ってまた大変な思いをするかもしれないから。・・・」（11話　偽り）

これは一連の会話がメタファーとなっている。ミニョンのいうあっちの横断歩道というのは、ミニョン自身をさすであろう。自分の方に誘いたい気持ちがよく現れている。

故障していたとしても、というのはサンヒョクとの間がしっくりしなくてもという意味か、あるいは間違った結婚という意味のメタファーであろう。回り道というのはまたミニョンのもとに戻ることだろう。それらをメタファーによって婉曲に伝えている。

③遠い場所への船出　ー逃避行ー

この場合の船出はあてのない旅であり、これも道メタファーの一つである。

ミニョン「そう、船、それで・・・ずっと海を巡って、一生戻らないというのはどう？」(18話　運命のいたずら)

このようにミニョンは空想上であるが、「二人きりで船で逃げよう」という提案する。つまりミニョンは、今の苦境、つまり二人は兄妹かもしれないという不安を一瞬だけでも忘れたい。しかしユジンが現実に引き戻す。「月日が経ったら、船も古くなるだろうし、漕いでくれる人も年を取るだろうし、そしたらすごく大変になって、きっと戻って来たくなるはずよ。」(18話　運命のいたずら)

ミニョンの白昼夢のような提案に対して、ユジンはいかにも女性らしい現実感で将来を案じる。純愛は一途な道であるが、一方でこの船出は逃避行に似たメタファーで、純愛の道から逸らすものである。つまりミニョンが、船出というメタファーによって家族や友人というしがらみを断ち切る新しい恋愛観を提唱するが、家族愛や恨にとり巻かれたユジンは引き留まってしまう。

（2）道しるべメタファー

道を到達するに欠かせないのが道しるべである。それがこのドラマではポラリス（北極星）である。ユジンにとってのポラリスはチュンサン（ミニョン）であるが、実際にはユジン自身の動じない生き方の方がポラリスのようである。

①道しるべ

チュンサン「いやポラリスは絶対に位置が移動しないんだ。だからどこにいてもすぐ見つけられるだろう。これから道に迷ったら、まっ先にポラリスを探してごらん。いつもその場にあるはずだから。」（2話　はかない恋）

このポラリスは明らかに絶対的に支援する人、ここではチュンサンをさす。

車の天井のポラリスを見ながら、

ミニョン「僕は大丈夫だから行って。その代わり、・・・帰り道・・・迷わずに見つけることができますよね。・・・ずっとずっと後になっても見つけて戻って来られますよね。」(10話　決断)

これも、最後には自分に気持ちを向けて欲しいと信じるメタファーである。

ミニョン「他の星がみんな動いてもポラリスはいつも同じ場所にあるって言いましたよね。もし他の人たちがユジンさんのことを許せないって・・・理解できないって・・・そう言って去ったとしても・・・僕がいつも同じ所にいてあげれば・・・道に迷うことはありませんよね。」(10話　決断)

「僕がいつも同じ場所にいて」はポラリスと言いかえられる。絶対的な支援者がいればいつも安心して帰って来られるというメタファーである。

現実の道しるべは大切であるが、それがなくてもユジンの気持ちは変わらない。つまりユジンは結局過去のチュンサンへの愛という点では動かない。これがこのドラマの基軸で

あり、これこそがポラリス（北極星）というメタファーにふさわしい。

②道しるべを見失う

逆に、道しるべ（恋人）を失った人は置き去りにされ、迷うことになる。

ミニョンがチュンサンを取り戻す場面で、チェリンが車の行き交う横断歩道を走っていき、中間あたりでサンヒョクに捕まる。そこで二人が取り残される。(14話　2度目の事故)

これは二人がスムースに道を渡れないこと、歩めないことで、恋愛がスムースに進まなかったり、恋愛から取り残されることのメタファーである。

そして、ユジンも道しるべを失うと迷ってしまう。

ユジン「きっとそのせいで道に迷ったんだわ。」(18話　運命のいたずら)

この前にポラリスのネックレスを落とし、星が取れてしまうシーンがあり、ユジンはそれを道に迷った理由にしている。道に迷うのは純愛の道から逸れることである。

2　成就メタファー

純愛の道は踏破される。その踏破されるプロセスで新展開のきっかけを作るのがパズルメタファーであり、その完成が家メタファーである。

（1）パズルメタファー

パズルを埋め合わせていけば完成である。つまり恋愛は成就されて結婚となる。このドラマでは、パズルを埋め合わせれば必ずといってよいほど意中の人に出会える。20話の「冬の終わり」では、目が不自由となり自分でパズルを埋め合わせることができない。しかし、自分が好きな人が助けてくれてはじめてパズルが完成する。つまり二人で一人という、足りないところを補って歩める夫婦を暗示するメタファーであろう。

（2）家メタファー

家とは、家庭を象徴する。家族を大切にする韓国であればこの家の意味は大きい。

ユジン「本当に好きだったら、形としての家はどうでもいいんです。好きな人の心が一番素敵な家だと思います。」（4話　忘れえぬ恋）

家は暖かい家庭を象徴し、しかも心による結びつきが何より大切であることを示している。二人が同じ建築関係の仕事をしているのも象徴的である。形とは、世間体を重視した結婚のことであろう。

ユジンは実際には建てるのが不可能な家を設計して、それをミニョンが建てる（20話　冬の終わり）。現実には一緒に住むことができないという意味で不可能なのだが、心の中では一緒に住むことができる。

（3）建築メタファー

家庭を築くというメタファーもある。道は時間をかけて踏破されるが、同じく家も時間をかけて築かれる。

ミニョン「これから僕たち、いろいろなものを二人で作っていこう。一緒に見て、一緒に考えて、一緒に感じながら、そうやって生涯一緒に歩いていこう。いいよね。」(17話 障害)

これは結婚を料理にかこつけたメタファーであり、建築にも共通する。また結婚による同一化でもある。

3　時間メタファー

道をたどるには時間がかかる。サンヒョクとユジンの間における恋愛の時間はまさに積み重ねである。儒教の教えでいうと、積み重ねたものに対しては敬意を表する。従って、ややもすると感性に従う純愛を妨害する。サンヒョクはミニョンに対してつき合った時間の長さで対抗している。

一方で、時間には積み重ねとは反対に風化という意味もある。「時間が解決する」という表現は、時間が経ったら忘れられることを意味する。同じ時間でも時と場合によって意味（根拠）が異なっている。

（1）積み重ねとしての時間

キム次長「10年くらい飼ってんだっけな。・・・一緒に飯も食って、一緒に寝て、・・・」(10話　決断)

これは10年の月日は重いことを暗示した諷諭(allegory　アレゴリー)である。諷諭とは物語風になったメタファーである。これは時間の積み重ねを尊重した道徳を示す。似た諺に、「生みの親より育ての親」、また長いこと寄り添っているとお互いが似てくるという「似たもの夫婦」がある。

ミニョン「こんなふうに・・この一歩一歩が集まると何になると思いますか？」
「・・・時間です。ユジンさんとともに過ごした・・・その長い時間、一度に二歩歩くわけにはいかないでしょ。」(10話　決断)

時間ではサンヒョクに勝てないので、ユジンを譲らざるを得ないと婉曲に伝えている。この際の「時間」は積み重ねのメタファーである。たどるには時間がかかるという意味では道メタファーと密接にかかわっている。この場合には、サンヒョクがユジンと過ごした時間のことで、純愛の道と対立して走るつれ合いの道である。

（2）風化としての時間

元恋人のチェリンに対して使うミニョンの「時間が必要だ」（8話　疑惑）という時間は、積み重ねではなく風化による解決を意味している。

4　雪メタファー

（1）純愛に関係する意味

最初の雪の意味は①「非日常性」である。特にスキー場は日頃のルーティーンな生活とは違った非日常的なものである。そして普通にはない気持ちの高まりをもたらせてくれたり、人を好きにさせる雰囲気を作ってくれ、そこではエピソードも生まれやすい。メタファーの解釈としては、「雪のようにうきうきした」である。

そして雪が珍しい地域では雪はめったにやってこない。つまり雪は②「つかの間の喜び」でもある。これが雪の二つ目の意味である。メタファーの解釈としては「雪が降ったときのように嬉しい」である。しかし雪のつかの間の喜びはすぐに消えてしまい落胆する。

（2）恨に関係する意味

雪は③「溶けない間は秘密を隠してくれる。」つまり溶けなければ嫌なものを見なくて済む。これは父親のルーツが明らかになることをさしている。また溶けた時の落差が怖いから溶けるのを恐れる。メタファーの解釈としては、「雪が溶けた時のように残念な」であり、これが三つ目の雪の意味である。

そのような雪の三つの意味をドラマ全体にうまく生かしている。このように、雪はつかの間の盛り上がりを作ってくれる時間にかかわるメタファーである。Lakoff & Tuner (1989) 流にいえば、「時間は変化をもたらす」に該当するメタファーであろうか。

ミニョン「僕はまだ冬を楽しみたいのに、ここでは雪が隠していた見たくないものがよく見えてしまうようで。もう一度戻りたいな。」(11話　偽り)

雪がもたらすつかの間のうきうきした恋をもっと味わいたい。しかし一方では雪が溶けて隠れた出生の秘密が露わになるのが怖い。

ユジン「10年前、冬が終わって春が来たから。今回も冬が終わったら全部消えちゃうような気がして。」(17話　障害)

この冬は雪の意味であり、うきうきした気分が消えて再びミニョンが遠のいてしまうのを恐れている。

また冬に海水浴場で見つけるコインは、雪とは違って形は残っているものの、楽しく遊んだ夏の思い出を覚えているだけに哀愁を誘う。

ミニョン「この海は冬なのに、このコインだけは夏なんだね。」(18話　運命のいたずら)

このコインはスキー場の思い出と同じ意味であろう。自分もコインが落ちた夏に戻りたいが、コインが覚えている楽しい季節はすでに終わっている。このセリフには、ユジンと仕事を一緒にしたスキー場の時に戻りたいという願いが込められている。

Ⅲ　登場人物に見られる対立するメタファー

1　明と暗（未来と過去）

未来は光であり明であり、一方の過去は影であり暗である。これは瀬戸によるFigure 2でいえば視覚メタファーの光メタファーに含まれる明暗メタファーである。ここでは、過去と未来また明と暗に分けてまとめてみる。

（1）過去と未来

①過去は足跡

このドラマの中では、足跡を踏むことは過去を覚えておくことと同意で、その人の足跡を刻むというのはその人と同化したい気持ちのことであり、ユジンの場合はチュンサンを忘れないようにいつも心に刻印して生きることである。また死んだ人の場合には、影を追

うことになる。雪のシーンでもミニョンの足跡を踏むシーンが出るが、いかにも過去の人を思い出すしぐさである。

ユジン「何をしてるの？」
チュンサン「足跡を踏んで歩いてるんだ。ユジンのことを忘れないように。」（2話　はかない恋）
　チュンサンが死んだと思ったユジンは、今度は自分がそれを実行しようとした。

②ユジンの過去志向
ユジン「影の国で寂しくないためにはどうすればいいかわかる？」「誰かがチュンサンの影を覚えていてあげればいいのよ。こうやって。・・」　（2話　はかない恋）
　これは将来チュンサンが消えていくことを暗示するが、これが影であり、それを踏むことは心に刻むことである。影の国と足跡の刻印は過去に生きることを示す。

③ミニョンの未来志向
ミニョン「死んだ人にとって一番の贈り物は忘れてあげることです。おわかりですか？」（6話　忘却）
　ミニョンは、「死んだ人（チュンサン）への贈り物が忘れてあげること」と諭した上で、「世界はこんなに美しいのに」と自分の未来へと誘う。

（2）過去と未来の融合
　ミニョンが過去を取り戻すこと、つまりチュンサンに戻ることによって過去と未来が融和する。

ユジン「あなたが思い出すたびにプレゼントをもらっている気分。」（15話　過去への旅路）
　ユジンにとってのプレゼントはミニョンがチュンサンのことを一つ一つ思い出すことである。結局、パズルの埋め合わせと同じで、昔をよみがえらせること、つまりチュンサンに帰ることが彼女にとっては喜びのすべてである。

ユジン「どうしてわたしたち、昔の思い出ばかり取り戻そうとするのかしら？過去の思い出も大切だけど、これからわたしたちが一緒になって作っていく思い出の方がずっと多いじゃない。わたしたち、思い出を取り戻そうとするのはやめましょう。」（15話　過去への旅路）
　これはミニョンの記憶が戻って、チュンサンと同一人物なのがわかったからであって、もう過去に固執する必要はなくなって、未来へと向かうのも容易になる。

（3）明と暗の対決（光と影の対決）
ミニョン「ここは・・・これほど美しいのに、ユジンさんが見ているものはなんですか？思い出しかないでしょ。悲しい思い出しか見えないんじゃないですか。」
ミニョン「心をそんなに縛りつけて、誰を愛せるんですか。ユジンさんこそ、影の国に一人で住んでいるんじゃないですか。・・・」（7話　冬の嵐）

影とはここでは過去のチュンサンのことをさしている。雪の足跡を踏むこと、つまり過去のチュンサンを追いながら生きてきたユジンに対する痛烈な一撃である。

ユジン「あなたには人を愛したことがあるの。いやないわ。」(第６話　忘却)
愛したことは過去である。ユジンが過去に固執している証拠のセリフである。

また過去と未来を対比させるためにファッションもメタファーにしている。過去に生きるユジンの服装はあくまで地味であり、未来に向かおうとしているミニョンの服装はあえて派手にしている。二人が歩み寄る１８話になるとファッションは似通ってきて、同じトックリのセーターを着て夫婦気取りになる。これは視覚の中でも色彩メタファーであろうか。

2　愛における直感と道徳*

これは打算もなにもない純愛と、打算がある現実の結婚の対比である。純愛の担い手はユジンだが、それを直感によって導くのはミニョン、そして道徳によって導くのはサンヒョクである。直観と道徳は具体物ではないが、それを現実の人物へと具象化して表現している。

（1）直感の愛

ユジン「私が忘れたくてもこの目がチュンサンの顔を覚えているの。この胸がチュンサンのいった言葉を覚えているの。」　（７話　冬の嵐)

ミニョン「いいえ、ただ・・・愛する理由が多すぎるような気がして・・・」
ミニョン「そう思いますか？じゃ・・たとえば僕が好きな理由は何ですか？」
ミニョン「言えないでしょう。本当に好きなら今のように理由をあげられないものなんですよ。」(７話　冬の嵐)
恋愛は本来感覚的なものであり、感覚こそ正直である。ごまかしの愛に対するのは直感の愛である。

ユジン「私、ミニョンさんにはごめんなさいなんて言いません。ミニョンさんは私の一番大切なものを持っていったから。・・・」(第10話　決断)
持っていったのは心である。

チンスク「チュンサンのどこが好きだったの？」
ユジン「すっと吸い込まれる感じがしたの。ミニョンさんと出会ってから吸い込まれた。顔が似てるって感じじゃない。胸がね、高鳴ってきて、ミニョンさんが呼び起こしてくれたの。」(12話　10年前の真実)

ユジン「テストされているみたい。正解を教えて」(11話　偽り)
ミニョンへの愛を思い出すとびくっとするのは、隠しているものが暴かれそうで不安だ

＊この場合の道徳という意味は、「人のふみ行うべき道」というより、社会の掟に配慮したという意味で、直感に対比させたものである。

からであり、いわば本音が漏れそうになるからである。ここではその本音をごまかす方法を教えてと訴えている。

（2）道徳に沿った愛

サンヒョク「・・・道徳的に許されないことは絶対にしません。・・・」「ただし、自分の物はどんなことがあっても守り抜くつもりです」（9話　揺れる心）

これはつき合いの長さを頼りにした主張である。

ミニョン「指輪のことですよ。婚約指輪みたいですね。でも、すごくキラキラしているのがユジンさんのと感じがちょっと違いますね。」（4話　忘れえぬ恋）

キラキラとしてる割に表情が暗いと対比させ、結婚がけして幸せそうでないことをついている。「あなた方の婚約はむやみに派手な指輪のようだ」という皮肉ったメタファーである。つまり幸せでないのを表向きのあでやかさで繕っていると指摘しており、フロイトの防衛機制でいえばいわゆる反動形成のことである。この派手な家とか結婚の証としてのキラキラした指輪と対照的なのが心の家である。

Ⅳ　冬のソナタのメタファーにおける考察

（1）道メタファーを基本としたまとめ

このドラマには道路や並木道といった道が頻繁に出てくる。これが概念メタファーの一つである道メタファーである。ここでは概念メタファーについて考察したLakoff & Turner (1989) を参考に、道メタファーが時間や雪、家などのメタファーとどのように関連しているのかについて、一連の流れとしてまとめてみたい。さらにそのプロセスにおいて、メタファーの融合がどのような発展的意味を持つのかを探りたい。

①道メタファーにおける流れ

まず「人生は旅」という概念メタファーは、旅という認知図式の持つ構造を人生という概念領域へと写像しているという (Lakoff & Turner, 1989)。旅は道のりであり、「純愛は道」もまさに「人生は旅」と同じ構造をなしている。これは、Figure 2 における瀬戸のメタファー分類によれば運動のメタファーであり、それには「起点」、「道のり」、「終点」がある。そして道のりをたどるには時間がかかり、その時間は変化をもたらす (Lakoff & Turner, 1989)。その純愛と並行に走っているのが、つき合い時間の長さを誇る道である。これは道徳にかかわり、ユジンにとっては恨となる。また道をたどる途中で障害が出てくる。だから道を案内してくれるような手を引く人が必要となり、また道しるべも必要となる。

また道のりは時間がかかり変化をもたらすが、雪もパズルもまさにこの「時間による変化」にかかわる。出会いは道の起点ともいるもので、初雪がもたらし、その結果の「つかの間の喜び」も同じく雪の変化によるものである。一方で、雪はすぐに溶け、また溶ける時に見たくないもの、つまり出生の秘密が明らかになる。これも雪による変化である。この場合、出会いと喜びは純愛に、また出生の秘密は恨に当てはまろう。またその途中でパズルでは、うまくはまると次に進んで思わぬ人に出会えて完成に近づく。

さらに達成されるその道は、建築と同じように築き上げられる。二人が同じ建築にかか

わる仕事に携わっているのも、まさに愛が築き上げられるからである。そして道しるべに沿って歩むと道は踏破される。道の踏破とは二人が一緒になることであり、その成就は家にたとえられ、純愛の終点である。その完成された家は現実の家というより、心に建てるという象徴上の家である。

②純愛の道のりでのメタファーの対比

さらにこのドラマでは、代表的な人物の生き方をメタファーによって対照的に示している。たとえば旅でも楽しいときと苦労するときがあるように、道の途中では光が当たって輝く時と影になって暗く沈む時がある。これは感性的メタファーの明暗メタファーに当たる。明の方は、ミニョンの新しい恋愛観であり、また暗の方は、ユジンの過去にしがみついた生き方である。具体的なメタファーでいえば、未来志向のミニョンによる「美しい世界」に対して過去志向のユジンの「影の国」である。

一方で悟性的メタファーによる対比もある。純愛はそもそも打算もない理由もない直感や本音に従うもので、逆に現実の結婚は、「派手な結婚」に代表される打算による結婚とか家族の勧める相手との結婚、さらには時間の積み重ねを尊ぶ結婚である。純愛に従うのがミニョンの直感に基づく愛であり、それに対して道徳に従うのがサンヒョクに対する愛である。大きく分ければ、明と直感が純愛を導き、暗と道徳が恨の受け入れをうながすといえる。

従って、①と②をまとめて図式化するとFigure 3のようになる。左側に純愛と恨(家族・友人愛)を、そして右側の雪は双方に関連し、その間に中核となる道を示した。

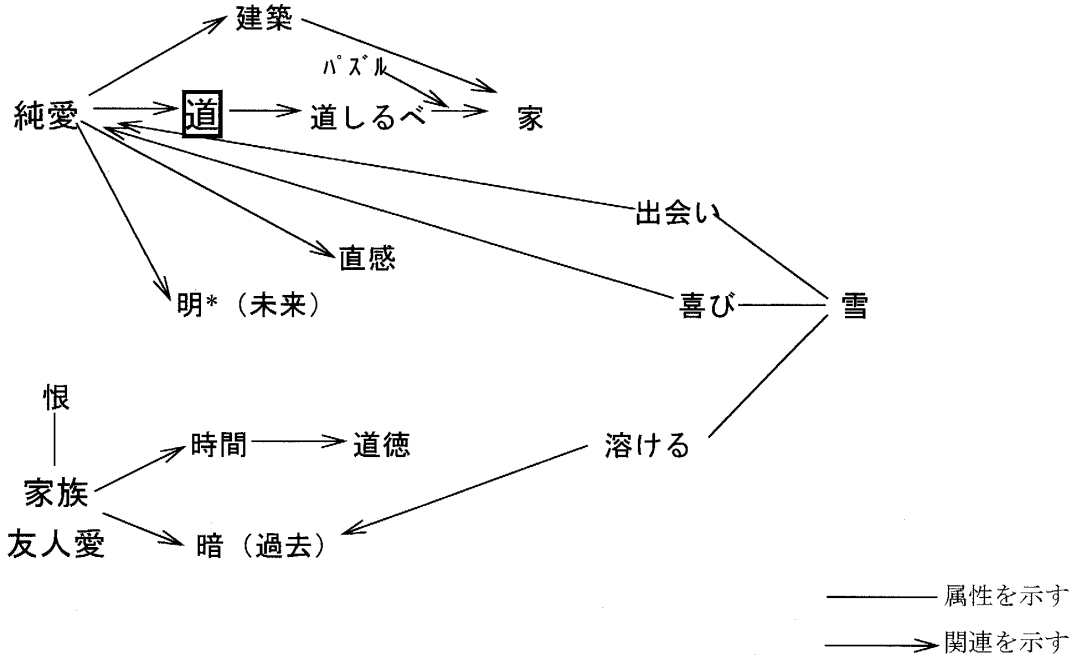

Figure 3　メタファーの関連図

*純愛に関係する明は、高校時代のチュンサンであり、また再会以後のミニョンである。

（2）対比メタファーの融合から見えてくること

上の②であげたいくつかの対比メタファーは、純愛の道が達成されるプロセスで融合す

る。その融合はドラマにどのような新たな意味を持たせたのか。

①純愛と家族・友人愛の融合としての普遍の愛

純愛の道のりはミニョンが導くものであり、一方のサンヒョクの導く道のりは時間の長さを誇る道であり、純愛の道と並んで走っているように見える。サンヒョクの方へなびかせる力は、自分（ユジン）を慕ってくれる人へ返す愛であり、さらに家族・友人愛であり、それを後押ししているのは金（1998）のいう韓国独自の拡大自己と関係自己であろう。この純愛の道と、それを妨げる家族・友人愛の道がメタファーの最初の対比であるが、その二つの道はユジンの最終目標で融合する。

このドラマの興味深い点は、純愛の道はそれが達成されるプロセスで、それが家族・友人愛の道と見分けがつかなくなる点である。つまり純愛と家族・友人愛が融合すると、総じて普遍的な愛となる。特にミニョンが導く道はユジンの最終目標だが、サンヒョクも最後にはそれを助ける形になっている。小倉（2004）によれば、「個人の愛」と「共同体の愛」は対立構造にはならないという。つまり、「冬ソナ」にはまる日本人は個人化の極をきわめつくし、疲弊してしまった日本的「愛」に韓国的な「共同帯の愛」をクロスさせることによって物語に新しい生命力が蘇るのを感じたという。

実際に、このドラマのすべての登場人物が、自分のこと以上に誰か他の人のことを思いやっている。映画監督の大林宣彦はあるテレビ番組の中で、「冬ソナの登場人物が流す涙はいつも他の人のためである」と語っていた。悲しい場面もあるのに視聴者の心をいつも温かくしてくれるのはそのせいである。岡本（1997）は、中年期以降の自我同一性として、他者のために生きる関係性の同一性が重要な位置を占めていると唱えているが、まさに中年期以降の女性に人気のあるのも、単に純愛への懐かしさだけでなく、この他者への思いやりや犠牲的精神ゆえである。またジェームス三木（2005）は、人間関係において三角は角（かど）があるが、7角になると角が取れて丸くなると述べている。

②直感による愛と道徳による愛の融合としての献身愛

二つ目にあげておきたい対比の融合が、ミニョンの直感の愛と、サンヒョクの道徳による愛の融合である。これは①の純愛と家族・友人愛とも関連しており、小倉（2004）によれば、プリモダンである社会への愛からポストモダンである個人への愛に移るという韓国における恋愛観の移り変わりを反映している。ミニョンは本人が選ぶ人を優先して、「サンヒョクさん、ユジンさんが誰を愛しているか知りたくないのですか」とサンヒョクに迫る。それに対抗してサンヒョクは「僕は人のものを奪ったりはしません。でも自分のものは守ります」と答える。ミニョンは愛とは本来感性で引かれるものであって、譲ったりするものではないと言う。だから時としてその形は「奪う」ことにもなりかねない。一方の、サンヒョクはこれだけあなたのことを愛しているのだから応えてくれてもいいという古い道徳観に依存している。対照的にいえば、ミニョンは「奪う、あるいは奪わないまでも引き合う」であり、一方のサンヒョクは「守る、またはなびいてくれるのを期待する」である。その感性と道徳という対比をミニョンとサンヒョクという人物イメージ、つまりメタファーの対比にして表している。ところが、この奪う・守るの対立も最後には、どちらかがユジンを幸せにしたらいいというところに落ち着く。

ジェームス三木（2005）はドラマの面白さについて、主人公がコンプレックスを変えて

いくことにあると述べているが、まさに二人ともにユジンを幸せにするように変化して、まさにその点では最後には似通ってくる。川邊（1987）からいれば、ドラマの典型は正と反の融合であるが、このドラマには正・反はなく、そもそもどちらも善であるという（小倉，2004）。

③明（未来）と暗（過去）の融合による未来に向けた過去の投影

三つ目にあげておきたいのが明・暗の融合である。これは未来と過去とも言いかえられよう。明（未来）がミニョンの考えであり、また暗（過去）がユジンの生き方である。ミニョンが影に生きるユジンを最初こそ批判して、自分（ミニョン）という未来を見つめるよう誘うが、チュンサンとしての記憶が戻り、自分の生い立ちに気づくにつれ過去にこだわりはじめる。一方で過去に生きていたユジンはミニョンの記憶が戻り、チュンサンと同一人物であることがわかると、過去を追い求めるのは止めて未来に生きようと宣言する。つまり最後には未来と過去つまり明と暗が融合してくる。これらを「美しい世界」と「陰の国」という対照的なメタファーで表し、最終的には二つを融合させ、一体化させて将来に生かそうとする。

このように一時は死んでしまったと思えた初恋の人が再びよみがえることは、高野（2004）が紹介した視聴者からの意見のように、すでに亡くなった人の面影を未来に向かって生きている人に投影させては慰められることにつながる。

Ⅴ　最後に　ードラマの人気とからめてー

このドラマの中心は、純愛の道とそれを妨害するような恨あるいは家族・友人愛（恨）の道を対比させることである。さらに雪のもつ「つかの間の喜び」を純愛に、「すぐに溶けるはかなさ」を恨に生かしている。中江有里という女優が、あるラジオ番組で脚本は家の骨組みに当たると語っていた。つまり脚本は表からは見えないが、基礎作りをする上で欠かせないものであるというが、まさにこのドラマでは道という概念メタファーが脚本の骨組みをなし、雪がそれに色どりを添える形をなしている。

加えて、ドラマの構成には欠かせない正と反を、２つの道を導く男性人物に託した上で、これらを、「純愛の道」対「家族・友人愛の道」さらには「直感による愛」対「道徳による愛」というメタファーで対比させ、最後には超目標である一人の女性の幸せという点に両者を融合させた。それがこのドラマをハッピーエンドにまとめ、心地よいものにしている。さらに純愛にとって夢であった心の家を実現させる構成も、一方が視覚障害を負って他方が助けながら生きざるを得ない構成も、これらの融合をゆるぎないものにしている。

ではこのドラマは、なぜこれほどまでにメタファーを用いたのであろうか。まずは、このドラマがなによりも映像から作者の意図を伝えようとしたからであろう。それゆえに視覚メタファーを主に用いたのであろう。しかも作者の意図する正と反を魅力的な人物に載せたことによって、ドラマを視聴者に容易に受け入れさせ、その結果として視聴者にメタファーを解釈させて情感を呼ぶことにつながった。つまり具体的な人物のメタファーによって受け入れやすくした上で、最終的には抽象化を、つまり骨組みをつかませ、さらに情感に訴えかけようとしたのであろう。

最後に、冬のソナタが中高年の女性に人気が出た理由にふれてみよう。まず、若い頃に育んだはかない純愛を雪がよみがえられてくれたのであろうし、純愛の象徴である心の家

を描いて懐かしい気分に浸ったのであろう。さらにはドラマが示す愛が、純愛だけに留まらず、普遍的な愛にもつながることにも興味をそそられたのであろう。さらに心を動かされたのは、道メタファーの中では、もちろんユジンの純愛の道であろうが、それ以上に動かされたのはミニョンが演じたところの道しるべである。多くの女性は、自分をユジンの立場に置き、ポラリスといういつも見守ってくれる絶対受容に似た感覚で癒されたのであろうし、しかも最終的には、女性自身が不動のポラリスかもしれないとする自己の同一性にめざめたのであろう。このように、メタファーを介して、いろいろな発展的な意味に気づかせてくれるのが冬のソナタというドラマである。

＜引用文献＞

ボネット　J. 吉田俊太郎（訳）2003　クリエイティブ脚本術 ―神話学・心理学的アプローチによる物語創作のメソッド　フィルムアート社（Bonnet, J. 1999 *Stealing fire from the gods: A dynamic new story model for writers and filmmakers. Michael Wiese Productions.*）

ジェームス三木　2005　サタデートーク ～輝け！熟年「楽しさを、そしてやすらぎを」NHKラジオ

カタン　T. L. 渡辺秀治（訳）1999　夢を語る技術シリーズ1 ストーリーアナリスト ―ハリウッドのストーリー分析と評価方法　愛育社（Katahn, T.L. 1990 *Reading for a living: How to be a professional story analyst for film and television.*）

川邊一外　1987　ドラマとは何か？　―ストーリー工学入門　映人社

金　義哲　1998　韓国人の社会的行動1 ―恨―・2 ―我々意識―　山口 勧（編）社会心理学 ―アジア的視点から　放送大学教育振興会　Pp.129-147.

Lakoff, G. & Johnson, M. 1980 *Metaphors we live by.* Chicago: The University of Chicago Press.

Lakoff, G. & Turner, M. 1989 *More than cool reason: A field guide to poetic metaphor.* Chicago: The University of Chicago Press

小倉紀蔵　2004　韓国ドラマ、愛の方程式　ポプラ社

岡本祐子　1997　中年からのアイデンティティ発達の心理学　―成人期・老年期の心の発達と共に生きることの意味　ナカニシヤ出版

高野悦子　2004　「冬のソナタ」、そして私と韓国　高野悦子・山登義明　岩波ブックレットNo.634　冬のソナタから考える　―私たちと韓国のあいだ　岩波書店　Pp.32-69.

安岡明子　2003　「冬のソナタ」で始める韓国語　～シナリオ対訳集～　キネマ旬報社

吉田圭吾　1999　第3章「青年期」　山中康裕・橋本やよい・高月玲子（編）シネマのなかの臨床心理学　有斐閣ブックス　Pp.42-57.

＜参考文献＞

伊藤　仁　2004　韓国ドラマNOW Vol.3　ありがとう冬のソナタ　主婦と生活社

<ABSTRACTS>

A study of metaphors used in the composition of drama
—— The case of the Winter Sonata ——

This study clarifies what types of metaphors were used in the composition of this drama. It was revealed that a road operated as the main metaphor to express pure love on which love for family and friends intruded. Time and snow acted as metaphors in support of the road metaphor, and in addition pairs of opposites such as light and dark, intuition and morality in love were metaphors expressing opposing traits or opposing lifestyles in two characters. It was further revealed that the fusing of these opposing metaphors made this drama interesting and had a therapeutic effect on the audience. The possibility was discussed that future drama could also employ metaphors of this type.